

宮城学院女子大学のめざすもの

宮城学院女子大学 学長 長谷部 弘

1. 女子大学をめぐる現状 ▼

女子大学に対する厳しい評価が続いている。マスコミやSNSの世界では、女子大学の先行き不安の言説が女子大無用論とともに吹き荒れ、女子大学関係者から見るとその言説の基調は不当なバッシングとも思えるほどである。

振り返ると、直接のきっかけとなったのは、今年3月に恵泉女学園大学（東京都多摩市）が大学と大学院の学生募集を2024年度以降停止する旨を公表したことだったと記憶している。全国紙の新聞報道はすでに3月時点で毎日新聞が取り上げるとともに、その後、4月に神戸海星女子学院大学（神戸市）の学生募集停止が告知され、5月以降に逐次各大学で新年度入学者内容の公表が進むにつれ、地方紙や各界ジャーナル誌が好んで取り上げるトピックとなり、夏には読売新聞や朝日新聞など全国紙が特集を組むなど、大きな広がりを見せた。受験産業が作り出すジャーナリスティックな言論の世界も似たような動きをみせ、女子大学に対する「時代にそぐわない」的批評はあとをたたない。

この10月に開催された全国の女子大学連盟における総会でも、各種マスコミやSNSにおいて拡散される女子大学に向けられた一連の辛口批評とその問題性が指摘され、女子大学側からの積極的な弁証の必要性も論じられた。今後の課題

career

HASEBE Hiroshi ●



1955年生まれ。福島市出身。東北大学経済学部、経済学研究科修了後、同学部助手、教養部講師、国際文化研究科助教授を経て1999年に経済学研究科教授。2021年定年退職し東北大学名誉教授。2023年4月から宮城学院女子大学学長。専門は日本経済史。博士（経済学）。

であろう。

もちろん、女子大学（特に4年制）の今後をめぐる客観的状況はかなり厳しい。長期的なトレンドを見ても、女子大学数（4年制）はすでに1998年に98校という最大数を記録して以降減少へと転じており、その後の25年間でおおよそ4分の3にまで減っている。背景には、18歳人口の右肩下がり化と高等教育体制の男女共学化という動きがある。すでに女子の大学進学率はこの数年間、短大もふくめて6割近くに達しており、高等教育機関という性質上、これ以上の女子大学入学者の母数増加を見込むことは現実的ではない。さらに、女子大学の受験者である女子高校生から見れば、当然のことながら進学先は女子大学に限定されず、男女共学の大学の方がむしろ機会は大きく広がっている。女子大学への入学者数の今後を予測することは短期的にも長期的にもけっこう難しいものがあるといえよう。だから、女子大学でしか学べないという教育コンテンツと教育能力、そして教育環境が、ブランド力として、入学志願者に対してどれだけ強

くアピールできるのか、また実際に就職や大学院進学においてどれだけ実効性のある教育成果を打ち出すことができるのか、それらが個々の女子大学に求められている。このような女子大学をめぐる客観情勢の分析は、個々の大学のポジショニング作業と合わせて深掘りされる必要があるだろう。

恵泉女学園大学は、その後、法人の財務状況や大学評価についてかなり良好な数字が出されており、女子大学の将来戦略を募集停止というかたちで余力を持ったまま閉じて行く戦略事例として捉える見方が多い。しかし、女子の高等教育になお課題と使命感を持って将来の経営戦略を展開していこうとする女子大学にとっては、日本の社会における女子大学の役割期待を積極的に掘り起こし、自己同定し、それを社会に向けて主張し続けていくことが課題となる。我が宮城学院女子大学（以下、MGUの略称を用いる）も、ミッションスクールとして136年にわたる女子教育を続けてきた実績を踏まえ、逆境の中での将来戦略を展開する必要に迫られている。以下、簡略ではあるが、MGUの現状と目指すところについて述べておきたい。

2. 宮城学院女子大学の 現状と目指すところ ▼

宮城学院はミッションスクールであり、1886



宮城学院女子大学 礼拝堂と校舎

年に宮城女学校として設立された時に設置目的とされた福音宣教と女子高等教育という建学の精神は、チャペルにおける大学礼拝とキリスト教教育のカリキュラム、そして教学体制全体を方向づけるリベラルアーツ教育カリキュラムという姿で現在もしっかり継承され堅持されている。さらに、一般教育カリキュラムの中には「MGスタンダード」としてキリスト教学や女性学が埋め込まれ、女子教育を建学の精神と「女性学的想像力」（天童睦子『ゼロからはじめる女性学』）とを結びつけながら進めていこうとする基本姿勢を確立している。このようなMGUの教育カリキュラムは女子大学の自己同一性を確認する意味で重要な教育資産の一つであると言える。

MGUにおける建学の精神は、現在「福音主義キリスト教に基づいて学校教育を行い、神を畏れ敬い、自由かつ謙虚に真理を探究し、隣人愛に立ってすべての人の人格を尊重し、人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育成する」という文章で表明されている。これは旧約聖書の十戒の内容であり、イエス・キリストがこの十戒を十字架と復活の出来事によって成就したことがキリスト教の福音であるから、建学の精神に基づいた女子教育は一方で福音宣教と同一線上におかれていることが確認できる。

他方、MGUスタンダード・カリキュラムにおける女性学教育は、常々指摘され続けているように、今なお家族や社会の中での日常生活において経験される「性支配」はもちろんのこと、社会の中に構造化され日常的には見えにくくなっているような性差別の構造をさまざまな学問分野の研究成果をもって明らかにすることを目的とする。このような女性学教育は、女性として自分のライフ・コースを自覚的に選択して自立的に生きていくことが必要な現代の日本社会にあって、女子教育における必須の学習プログラムであるといえよう。

さらに、大学教育を受けた女性が自立して生きていくためには、具体的な職業選択が、自分のライフ・ステージを念頭に置きながら一人ひとり個別になされなければならない。そのサポートをするために手厚いキャリア支援の仕組みが必要である。それに加え、社会からの「構造的」抑圧や矛盾を最も強く受けるのが弱い立場にある女性であることはしばしば指摘されている。MGUに入学してくる若い女子学生の皆さんもその例外ではない。弱い立場にあり、不利な条件に置かれているような女子学生に対する制度的支援の仕組みも重要である。MGUが持つキャリア支援室や学生相談センターの役割は重要である。

もし、本学が女子大学としてのブランド力を教
学コンテンツと教学体制に求めるとすれば、現在
持っているこのようなさまざまな教育資源を用
い、さらに磨きをかけ、問題や課題を深掘りしな
がら豊かにしていくことがまず挙げられるべきで
あろう。そして学生の皆さんが社会に出て自立し
て生きていくための専門的知識を育むために、社
会で必要とされる分野の教育ができるような教育
組織の改革が継続的に行われ続けなければならない。
それが、これからのMGUが避けて通ること
のできない大きな課題であり、それを達成してい
くことがMGUのめざす道であると考えている。